

もしもゼノブレイド2のコアクリスタルガチャが原作のダメな部分を残しながら黎明期FG○石ガチャ並のゴミクス要素もあったら。

エステバリス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——見渡す限りのブースター、天井にそびえたつ「課金キャラ」を中心に広がるガチャの沼。

それが、俺たちの暮らす世界「ソシャゲスト」だ。

この世界が出来るはるかな昔、人はソシャゲの神と共に暮らしていたという。

天井に築かれなかったプレイカードの荒野——

0円を10万円に無課金で最高レアを当てることが出来る理想郷。

人はそこを「楽園」と呼んでいた。

だけどある日、人は楽園を追われた。

理由は分からない。神の怒りに触れたのか、それとも運営の思惑なのか——

楽園を追われた人はソシャゲストに移り住んだけど、

最高レアを当てることができなかつた。

財布が滅亡に瀕した時、憐れに思った神は自らの僕——

「課金獣」iTunesカードをソシャゲストに遣わし、人を救った。

僅かに生き残った人は課金獣へと移り住み、幾万もの当たりとハズレを共に過ごした。

その課金獣が

今、死に絶えようとしている

そして、「楽園」を目指す旅が始まる——。

行こう、樂園へ！

## 目次

第一話	(ゴミガチャとの)	出逢い	1
第二話	機械仕掛けの人形 (ブレイド)	(12, 000G 払えも)	(5)
0 万G 貯めるからヤダ	く前編?	く	5

## 第一話 (ゴミガチャとの) 出逢い

レックスは死んだ。不用意に赤い剣に触れた瞬間、背後から仮面の男シンに心臓を刺し貫かれて。

レックスの意識は生きていた。気付けば彼は緑の草原にいて、一人佇む背中が空きのむちむち少女を見つけた。

「ここは——楽園。」

遙かな昔、人と神とが共に暮らしていた世界」

少女の声はどこか、悲しげだった。

滅びゆくある巨神獣<sup>アルス</sup>の背に暮らす必要もない、豊かな緑。

そこはまさしくレックスが求めていた楽園だと言うのに。

「そして——」私達<sup>が</sup>生まれた場所」

少女の声はひどく悲しげだった。

「え——嘘、ここが——？」

その信じられないほど肥沃な大地にも、その地に足着けているにも関わらず悲しい声で語りかける少女にも、レックスは驚いた。

そしてその景色と、死んだ自分が楽園にいる摩訶不思議さを問おうと少女の顔を見た時、胸部に輝く翠玉色の水晶に目を奪われる。そのバストは豊満であった。

「ゴアクリスタル……君は、ブレイド？」

「私の名前はホムラ。レア度は☆3です」

「え、ええ!! ☆3?! じゃ、じゃなくて、えっと、オレは——」

心底驚いた。レックスは☆3のブレイドを見た事なんてなかった。

実はニアのブレイドビャッコもまた☆3なのだが、そこはレックスが知らなかったのとビャッコがひどく礼儀正しかったためノーカウントで。

「知っています。」

レックス、でしょ？」

「……どうしてオレの名前を？」

「さつき、私に触れてくれた時に」

「え……あ、あれ？　そういえばオレ、なんでこんなところに——」  
レックスは控えめに言つて金にうるさめな性格ではあるが、善良な少年だった。

☆3ブレイドはドライバーも、そうでない者もすべからく貴重なお宝だ。ブレイドをモノ扱いする人間はそのレア度を聞いただけで正気を失い求めて来る。

小遣い稼ぎのロトとか強欲のスパイドとかそういうレベルじゃない。革命のビフロンズ、大喰らいのマーリンだ。横取りのジーニは気を付けよう。

「あなたは——死んだ。シンに胸を刺し貫かれてシンだ……ぷふ」

「ごめん、大して面白くない。あと笑えない」

死人をネタにするとかその死人が自分だとか、色々言つてやりた  
い。

「あ、でもでも、安心してくださいレックス。」

貴方が生き返る方法もバッチリ完備してるんです！

「え!?　それほんと!?」

「ええ。16%でしか登場しないコモンブレイド畜生とは違います。  
なんと言つても内部排出率1%の☆3レアブレイド。」

その中でも私は『天の聖杯』という当たり中の大当たりなのです  
から」

「天の……聖杯?」

「そう、天の聖杯。甦ったけど身体に悪意の泥が詰まるとか、レベ  
ル上限が解放されるとか、古代遺物とかそんなのじゃないんです。  
あ、勿論爆弾でもないですよ?」

具体的には言えませんが、すごいブレイドなんです。天の聖杯の力  
を使えばレックス、貴方は生き返れます」

「……生き、返る……」

ゴクリと固唾を飲む。

生き返るなんて、できるのか?

もし生き返つても、シン達を殴る事ができるのか?

「……それと、利用してるみたいでごめんなさい、レックス。」

もし生き返る決断をしたのなら、一つ聞いてほしいことがあるの」「聞いてほしい」と？」

ホムラは頷く。視線をレックスから外して楽園の地平線へと目を向ける。

ついさつきレックスと話していた人とは思えない、最初の悲しそうな顔でまた話す。

「……私達を、楽園に連れて行って欲しいんです」

「え……？楽園って、ここじゃないの？」

「ここは私のイメージの世界ですから。こういう景色だったというのは覚えているんです。」

「……この楽園は私達の故郷。私達は、ここに帰りたいんです。神とうげまのいるこの楽園に。」

「……実際に私が楽園に行ったことは、ないんですが」  
変ですよ、と言つて側に立つ木に手を添える。

木漏れ日がホムラの白い肌と赤々とした格好にアクセントをつける。

格好の黒い部分がおっぱいの豊満さを強調するように、木漏れ日もまた彼女の心情を表しているかのようだった。

また、レックスという少年はとても心優しかった。困っている女の子を見捨てない主人公の鑑のような少年だった。往年の少年漫画でも中々見ないタイプの少年なのである。

「うん、わかった。ならオレがホムラを連れていくよ！」

「行こう、楽園へ！」

「レックス……！」

元気の籠った返答にホムラは少しウルつとした。

しかしそれも一瞬のこと。彼女はすぐにしっかりと頷き返し、

「じゃあこの☆3レアブレイド『ホムラ』ピックアップガチャと『ホムラ』専用武器『天の聖杯の剣』ピックアップガチャを引いてください」

「はい？」

軽く耳を疑った。

「あ、ブレイドとアシストコアは一緒ですよ。」

表示は☆1が80%、☆2が15%、☆3が5%ですが、実はブレイドは下から当選率が16、3、1%です。

☆2以上確定保証もブレイド確定保証もありません」

ゴミクズの極みみたいな内容だった。消費者庁とかそういう問題に発展しそうなくらいにはゴミな内容だった。

しかし、そう、これこそが☆3ブレイドが凄いブレイドたる所以なのだ。しかしいくら☆3と言っても神は何を思ったのか「これならコモンブレイドでいいわ」となってしまいう程のハズレキャラもいるのだが。

「それと、コアクリスタルの同調は毎回オートセーブをする仕様なのでここでリセマラはできません」

「……え、じゃあどうすれば」

「それはもう、NEW GAMEしかないですね。はい」

それから胸を刺し貫かれること数百回。そして少年は少女と出逢った。

レックスのクリスタルガチャ施行数

現在629回



## 第二話 機械仕掛けの人形（ブレイド）（12,000G 払えも）（50万G貯めるからヤダ）（前編?）

レックスが数百回ものやり直しを終えた後のこと。

シンの腹シン（ホムラジョーク）であるメツになんとか善戦したりレックスの育ての親である巨神獣のじっちゃんことセイリユウが縮んだり、なあなあで同行したニアとビヤツコが捕まったり色々あった後。

レックス、ホムラ、じっちゃんはノポン族の少年『トラ』に匿われてひとまずは事なきを得ていた。

そして今、レックスは持ち前の正義感で捕まったニアとビヤツコを解放しに行かんと救出計画を企てていた。

「すごいざっくりすっ飛ばしたも」

「うむ、ゲームだどこまで進めるだけでやり込まなくても数時間は使うハズじゃが、まるで一瞬の出来事みたいだったのう」

「詳しく知りたければゼノブレイド2を買おう！

とでも言わんばかりの進行速度でしたね」

「そういうメタな発言は控えた方がいいと思う」

レックスのツツコミは皆受け流す。

「そうだも！ アニキの大きな助けになる手段が一つ、トラは持ってたもー」

「え、本当かトラ!?!」

「もつもつもー実はこれを人様にお見せするのは初めてだも」

そう言うトラはノポン族特有のまるっこい身体で家の一角にある、カーテンをバツと開いた。

「まだ誰にも見せたことのない、トラだけの秘密……『人工ブレイド』なんだも」

「人工ブレイド……」

「これがー」

ホムラとレックスが呟く。

視線の先には物々しい機械のケーブルに繋がれた、鋼の青髪。眼を閉じ、俯いていてもわかる幼さと鼻の絆創膏的なもの。そして嫌でも冷たさを感じる鈍色の肢体。

紛うことなきロボット少女だった。

「トラはドライバーに憧れてたも」

そしてトラは聞いてもいないのに身の上語りを始める。唐突な自分語りはノポン族の特権も。

「でもトラには……トラには、ドライバー適性がなかったんだも」

その悔しきはレックスもよく理解できる。レックスも元々はホムラの手でドライバーになるまではドライバーにはなれなかったからだ。

(話の都合のために数百回殺されたせいで共感ができないな)

しかし、世の中にはそれはそれ、という言葉もある。

「アニキ達は見たかも？ トリゴの街の大通りでドライバースカウトをやっているも。」

トラも1年前、ドライバースカウトに志願したも。でもー」

「ダメだった、というわけじゃな」

「トラくんも、あんな目に……？」

ホムラはトリゴに来た際に見た、ブレイドとの同調に失敗して全身から出血した頑強なグーラ人を思い出す。

「たわば!! ちにな!! いてえよく!!」とか言ってた気がする。

「も。」

三日三晩覚えのないリボ払い請求が来たも。金利がメチャクチャだったも。ノポン裁判不可避だったも。

ちなみにその件でグーラに駐留してるスペルビア軍に訴訟を起こして勝ったも……虚しい、戦いだっただも」

「そ、それだけ……？」

「それだけ？ じゃないも!!」

トラが絶対に支払えない金額だったも！人は血が出れば死ぬようにお金が底を尽きても死ぬんだも!!」

ぶんすかも！ とノポン族にしてはかなり大柄な身体を揺すって怒りの感情を露にする。

「まあともかく、この人工ブレイドが完成すれば、適性のないトラもドライバーになってアニキの助けになれるも」

「おお！ 凄いいではないかトラ。それはトラが一から作ったのかのう？」

じっちゃんが問うと、トラは自信あり気に首を横に振る。

「違うも。これはセンサーじいちゃんの作った基礎理論に、タテゾー父ちゃんの考えた構成パーツに、トラが穴を埋めるカタチで造ったも。」

じいちゃんと父ちゃんにも完成の瞬間を見せてやりたかったけど、じいちゃんは死んじやって、父ちゃんもどこかに行っちゃったんだも」

「……で、これ動かないのか？」

「もうほぼ完成形も。だけど足りないパーツがあるも」

「足りないパーツ？」

「買い足せばいいだけも。でもトラ、財布すつからかんも」

「……トラ、訴訟起こして勝訴したんだよな？その分のお金は……」

「全部ご飯と人工ブレイドの開発資源に溶けたも」

どうやら親子三代の夢には大きな金が懸かっているらしい。

「……貸せばいいのか？」

「できれば出してくれると助かるも」

ノポン族は商魂逞しい種族だ。だからこそ彼らは人語を介せる種族の中でもほぼ唯一と言っていいくらい人間と共存できる種族足り得ている。

まあ、逞しすぎて時々不祥事を起こしたり、今のトラのように堂々と開発資金をせびて来ることもあるが。

「わかったよ、いくら出せばいい？」

「だいたい60,000Gも」

「ーろ、60,000!？」

一気に出す気が引けてきた。この金額を余裕で渡す子供なんてそ



「流石アニキも！」

結局相場価値が上がっていたせいで支払うこともなく、サルベージでタダで引き上げたのは内緒だ。